

保育内容「表現」と自己効力感及び成績に関する一考察

— 教員の連携と絡めて —

八木朋美 齋藤 剛 丸尾真紀子

1. はじめに

教育職員免許法施行規則の一部改正に伴い、2023年に向けて本学では保育内容「表現」の授業の内容を検討している。保育における表現活動は、様々な授業（音楽・造形・運動等）が巧みに関わり合ったもの、いわば総合的な表現が求められている。それぞれの授業だけでなく、総合的な表現に関する授業も必要であると思われる。筆者らは、総合的な表現を具現化する試みとして、表現系科目の教員が連携して授業を行い、学生の表現に関する意識の変化に着目してきた。そして、教員が連携することは、学生の表現に対する意識の向上に有効である可能性を指摘した。また、教員の連携が有効であることをさらに裏付けるために、一般性セルフ・エフィカシー尺度（以後 GSES と略）を加えて分析を行った¹。自己効力感＝セルフ・エフィカシーとは、何かの行為に対して「自分はうまくできる」という、自分の能力についての期待や自信・確信のような感覚のことである。連携した授業の発表の場として、地域の行事、園児を招いた表現活動を設定した。結果としては、これらへの参加によって学生の表現の意識や GSES の向上は見られなかった。しかし、参加後に表現力が向上したと感じた学生は GSES も向上する傾向が見られた。また、教員の連携に対する学生の評価は高かった。

この結果を踏まえ、自己効力感の向上が学業に取り組む姿勢に変化をもたらし、成績の向上にも繋がるのではないかと考えた。

本研究では、表現活動と自己効力感及び成績の関係を考察することを目的とする。

2. 方法

2-1 対象

静岡福祉大学子ども学部子ども学科 4 年生 16 名²
(2018 年度入学者)

2-2 概要

2018 年に行った保育内容「表現」系科目の教員の連携及び表現活動において、対象者の活動前後の GSES の変化と成績についての相関関係を調べる。

2-3 統計

GSES や表現得点と成績との関係について、ピアソンの積率相関係数を算出する。有意水準は 5% とした。成績表をもとに、保育内容「表現」に関わる 5 つの科目「保育内容（表現 I）」「造形表現 I」「子どもと運動 I」「子どもと運動 II」「音楽 I」の成績と、2018 年度前期 GPA、2018 年度後期 GPA、2018 年度後期表現系 4 科目（「保育内容（表現 I）」「造形表現 I」「子どもと運動 II」「音楽 I」）の成績平均、表現得点（表現に関する意識の調査を 4 段階で得点化したもの）を活用する。

2-4 倫理的配慮

対象となる学生にはメールで研究の趣旨を説明し、Google フォームにて研究の参加について承諾を得た。

3. 結果と考察

3-1 活動前後の GSES の変化と成績

一部に、有意に正の相関関係が見られた。

前後期の GPA の変化と後期表現系科目の成績平均の相関係数は 0.70 であった。(図 1) 前後期の GPA の変化と後期表現系科目の成績平均は、有意に正の相関関係があった。表現系授業の成績が良い学生ほど、後期に GPA が向上している可能性が考えられる。

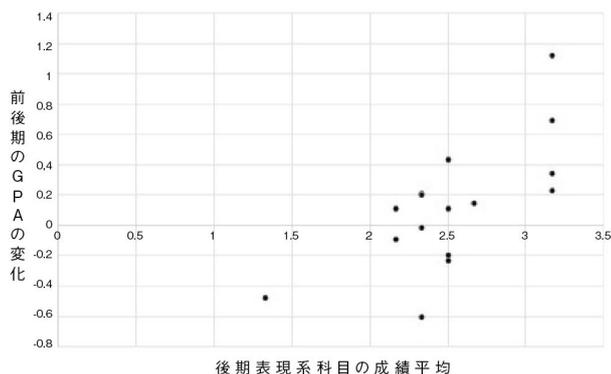


図1 前後期のGPAの変化と後期表現系科目の成績平均の関係

前後期の「子どもと運動 I・II」の成績変化と活動前後の GSES の変化の相関係数は 0.69 であった。(図 2) 前後期の「子どもと運動 I・II」の成績変化と活動前後の GSES の変化は、有意に正の相関関係があった。活動によって GSES が向上した学生ほど、「子どもと運動 II」の成績が向上した可能性が考えられる。

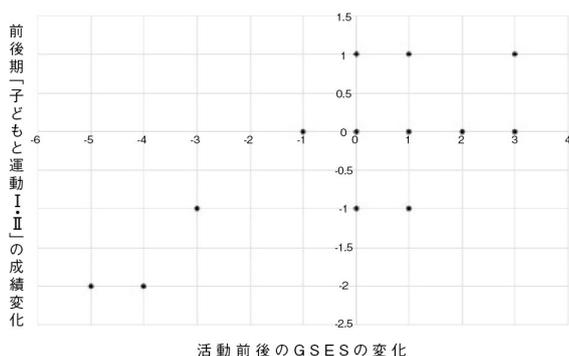


図2 前後期「子どもと運動I・II」の成績変化と活動前後のGSESの変化の関係

前後期の GPA の変化と「子どもと運動 II」の成績 の相関係数は 0.68 であった。(図 3) 前後期の GPA の変化と、「子どもと運動 II」の成績は、有意に正の相関関係があった。「子どもと運動 II」の成績が良い学生ほど、後期に GPA が向上している可能性が考えられる。

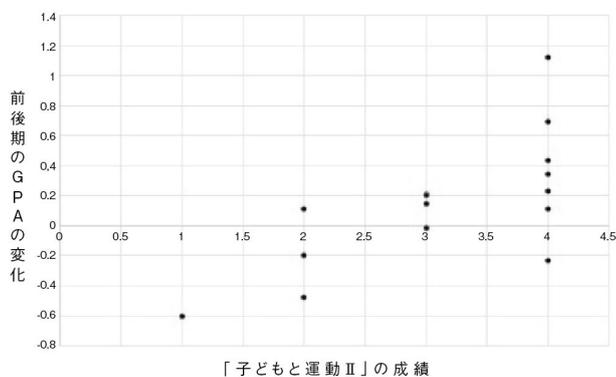


図3 前後期のGPAの変化と「子どもと運動II」の成績の関係

「子どもと運動 II」の成績と活動前後の GSES の変化の相関係数は 0.56 であった。(図 4) 「子どもと運動 II」の成績と活動前後の GSES の変化は、有意に正の相関関係があった。活動によって GSES が向上したことで、「子どもと運動 II」の成績が向上した可能性が考えられる。

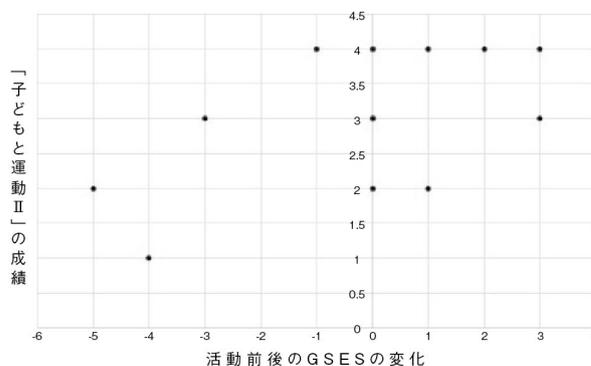


図4 「子どもと運動II」の成績と活動前後のGSESの変化の関係

前後期の「子どもと運動 I・II」の成績変化と活動前後の表現得点の変化の相関係数は 0.55 であった。(図 5) 前後期の「子どもと運動 I・II」の成績変化と活動前後の表現得点の変化は、有意に正の相関関係があった。活動によって表現得点が向上した学生ほど、「子どもと運動 II」の成績が向上した可能性が考えられる。

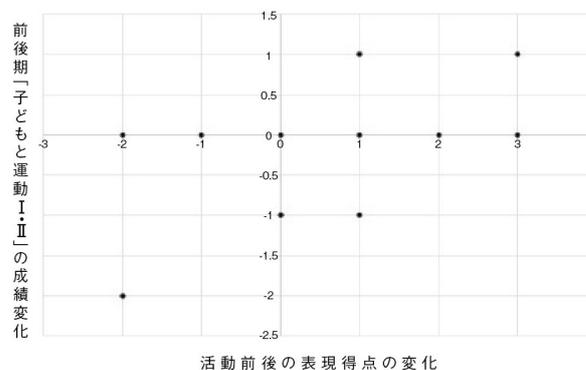


図5 前後期「子どもと運動I・II」の成績変化と活動前後の表現得点の変化の関係

前後期の GPA の変化と「造形表現 I」の成績の相関係数は 0.55 であった。(図 6) 前後期の GPA の変化と、「造形表現 I」の成績は、有意に正の相関関係があった。「造形表現 I」の成績が良い学生ほど、後期に GPA が向上している可能性が考えられる。

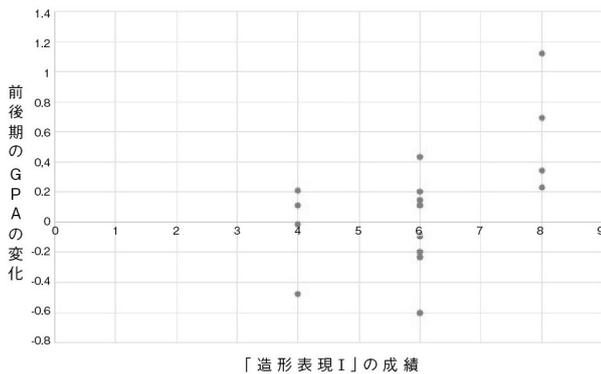


図6 前後期のGPAの変化と「造形表現Ⅰ」の成績の関係

3-2 表現活動と GSES の関係

筆者ら (2019) によると、教員の連携による表現活動への参加によって、学生の表現の意識や GSES の向上はみられなかったが、参加後に表現力が向上したと感じた学生は、GSES も向上する傾向がみられた。まず、なぜ表現活動をすると GSES が上がるのかを考えていきたい。

練習を重ねて、出来なかったことが出来るようになった、準備したことをやりとげた、という経験は達成感を生み、観客に拍手をもらうことは満足感につながる。全員で一つの目標に向かう過程は、対話や協調性が大切だと気づく。また、みんなでやり遂げたという一体感を感じることができる。体験による気持ちの高ぶりが GSES に反映されやすいと考えられる。

ここでの表現活動は、「保育内容 (表現Ⅰ)」「造形表現Ⅰ」「子どもと運動Ⅱ」「音楽Ⅰ」の連携のもとに成立している。苦手とする分野は、学生たちが互いに助け合い乗り越えたのではないだろうか。その経験が自信となり GSES の向上につながった可能性もある。

3-3 表現活動と GSES 及び成績の関係

「子どもと運動Ⅱ」は、GSES や表現得点、成績の向上と正の相関関係が見られた。表現活動だけが影響したとは言えない前提だが、この科目を軸に考察を行ってみたい。

「子どもと運動」は半期科目であり、1年次前期「子どもと運動Ⅰ」、1年次後期「子どもと運動Ⅱ」が開講されている。前期で基礎を学び、後期で実践する内容のため、表現活動もその一環として学びの積み重ねが実感しやすかったと言えるかもしれない。

「造形表現Ⅰ」「音楽Ⅰ」は1年次通年科目であり、基礎と練習の繰り返しで授業が構成されている。「保育

内容 (表現Ⅰ)」は1年次後期科目である。そのため、これらの科目は「子どもと運動Ⅱ」と比べて、今回の表現活動による成績への影響は見えづらかったかもしれない。

学びを生かした表現活動を行うために、教員はねらいを明確にし、連携する場合はそれをしっかりと共有することが大切である。学生にねらいを的確に伝え、それを自覚させたうえで活動を行うことが、自己効力感及び成績の向上に、より繋がると考えられる。

4. まとめ

サンプル数 (16) は少ないが、表現活動を通して、保育内容「表現」の一部の科目「子どもと運動」に関して自己効力感及び成績の向上と有意に正の相関関係が得られた。表現活動をすることが自己効力感及び成績の向上に影響する可能性が示された。

注

1 対象者は静岡福祉大学子ども学部子ども学科の1年生41名 (2018年度入学者)

2 注1の対象者のうち、研究同意が得られた学生

参考文献

- 坂野雄二 東條光彦 (1986). 一般性セルフ・エフィカシー尺度作成の試み 行動療法研究, 第12巻, 第1号, 73-82.
- 八木朋美 二木秀幸 齋藤剛 丸尾真紀子 (2019). 領域「表現」における教員の協働 日本保育学会, 第72回大会
- 田中龍三 (2014). 表現活動はコミュニケーション力や自己認識力の自己評価を高めている 21世紀型学力を育む総合的な学習を創る—新しい学力を育む教育調査 ベネッセ教育研究開発センター
https://berd.benesse.jp/berd/center/open/report/21seikigata/2002/04/chap04_04_02.html
 (参照 2021.11.24)
- 宇恵 弘 (2018). 芸術活動の経験が特性的自己効力感の形成に及ぼす影響 総合福祉科学研究, 9, 31-37.
- 和田敏江 山本洋之 (2014). 自己効力感と成績との関係—入学前を含めた1年生の追跡調査より—理学療法科学, 第29巻4号
- 奈須正裕 (2017). 「資質・能力」と学びのメカニズム 東洋館出版社